

はじめに—リハビリテーション・身体性・自己

理学療法でも作業療法でも、およそリハビリテーションの臨床において最初の手がかりになるのは患者の身体性だろうと思います。ここで言う「身体性 (embodiment)」とは、身体の構造・機能・形態などの生理学的・解剖学的次元だけを指すのではなく、その身体でどのような行為ができるか（あるいはできないか）、どのような行為をしがちかといったスキルや習慣の次元までを含みます。

一例として、「歩き方」について考えてみましょう。一般に歩行とは、左右いずれかの足が接地している間に逆側の脚を前に振り出して足裏が接地するという運動を繰り返し行うことを言います。このように定義するとあらゆる歩行が同じものに分類されてしまいますが、ひとたび「歩き方」に着目すると一人一人がきわめて多様であることに気づきます。歩幅が狭くいかにも高齢者然とした歩き方の人もいれば、上半身がゆっくりと左右に振れていかにも「ののそ」とした歩き方の人もいます。膝が内側に向いたいわゆる「内股」で歩く人もいれば、逆に外側に向いた「がに股」で歩く人もいます。体幹をまっすぐに保つ歩き方の人もいれば、体幹が左右または上下に大きく揺れる歩き方をする人もいます。「歩き方」それ自体が、いわばその人の身体性を凝縮して表現しており、「その人らしさ」をよく表しているように感じられます。

このような話から始めているのには理由があります。リハビリテーションの臨床では、患者の身体に備わる機能（とりわけ運動機能）をどのように回復し高めていくかに焦点が当てられるが、「身体性」に広く着目するなら、最終的には患者一人一人の「その人らしさ」が問われているという事実に目を向けてもらいたいからです。もちろん、脳損傷やその他の疾患によって失われた身体の運動機能を回復したり代替したりすることが重要なのは言うまでもありません。ただし、リハビリテーションを通じて獲得（あるいは再獲得）された機能が、新しいスキルとして過去の身体性を上書きし定着するところまでいかなければ、患者本人にとっては「歩けるようになったのにしつくりこない」「動かせるようになったのに、自分の手を取り戻した実感がわからない」といった感じ方から抜け出られない場合があります。

そうした意味で、リハビリテーションの過程は、物理的な次元での身体の損傷を経て、運動学習とともにそこから新たな身体性が立ち上がってくる過程であり、さらには、新たな身体性とともに新しい「その人らしさ」が獲得される過程でもあります。言い換えれば、身体性に由来する自己のあり方、すなわち「身体化された自己 (embodiedself)」が、身体機能を回復するセラピーの根底あるいは背景で問題になり続けているのです。

従来のリハビリテーションでは、身体性にともなう患者の自己のあり方はそれほど明確に焦点化されてこなかったように思います。他方で、リハビリテーションに従事して患者と日々向き合っているセラピストの中には、患者の自己のあり方こそが隠れた問題であると感じている人たちも多いのではないかでしょうか。身体の機能を取り戻すことだけが問題なのではなくて、自分らしさや自分らしい生き方をもう一度取り戻すことが重要だという問題意識です。本書では、身体性との関連で「自己」を論じるところから始め、自己を構成するさまざまな要因に関連づけながらリハビリテーションに言及するかたちで考察を進めてみたいと思います。

「自己」は哲学の問い合わせとしては古代ギリシアのソクラテスまで遡る古いたHEMAですが、ここでは現代のリハビリテーションにつながる文脈で「自己」についての考察を始めることにしましょう。現代における「自己」研究は、脳神経科学の発展に対して哲学が応答することで進展してきました。いわば科学と哲学の共同作業です。その代表的な例が、哲学者S・ギャラガーによる自己論です。ギャラガーは、2000年に発表した「自己の哲学的概念：認知科学にとっての含意」と題する論文の中で、当時の認知神経科学の知見に対応させつつ、自己の概念を「ミニマル・セルフ（最小自己）」と「ナラティブ・セルフ（物語的自己）」の二つに区別し、その後の研究の発展に貢献しています¹⁾。

これら二つの概念は以下で詳しく説明することにして、先に本稿の流れについて説明しておきましょう。ギャラガーによるミニマル・セルフとナラティブ・セルフの区別はわかりやすく、認知科学や神経科学の知見との対応を考えるうえでもよくできていますが、これら二つの区別だけでは、身体性と関連づけて自己について考察するには不十分な論点がいくつも残ります。本稿では、ミニマルとナラティブの区別を一方で受け入れつつ、両者の違いを考えるうえで重要な論点をそのつど付け加えて議論を進めます。

本稿の議論の特徴は、二つの自己の区別のあいだに「反省」「言語」「反実仮想」という論点を加えることで、自己が階層的に複雑化していく様子を描いています。議論は「身体化された自己」から「ナラティブ・セルフ（物語的自己）」へと広がっていくことになりますが、身体性に着眼しつつ自己という現象に体系的に迫っていくための論点を順番に整理しつつ論じることがこのレクチャーの目標です。また、論点ごとに関連するリハビリテーションの話題を参照しながら—今回は特に共著者の本田慎一郎氏の著作を多く用いて—臨床現場と自己を関連づけて読者にも理解できるよう考察を深めていきます。

1 経験の流れの中にある自己—ミニマル・セルフ

■ 暗黙の次元に目を向ける

日常生活のありふれた経験を記述することから始めてみましょう。トイレの水を流す ← 小便を出す ← 研究室を出てトイレに向かって歩く ← 便意を催す ← 研究室で参考文献を読んでいる……。これは、私がつい先ほど経験したことをふり返り、時系列を過去に遡りながら書き出したものです。

ひとの経験はこのように、途切れることのない一連の流れとして生じつつ「今ここ」の場面に至っています。全体の流れをひとつひとつの場面に区切って見ると、たとえば「トイレの水を流す」「小便を出す」というようなひとつの「行為」として取り出すことができます。前後の一連の行為と同様に、「トイレの水を流す」というひとつの行為は、私が自分でそうしようと意図して遂行している行為です。

ただし、それを遂行した私自身がそのことをはっきりと自覚していたかというと、そういうわけでもありません。ただ漫然と、トイレの水を流すためにボタンを押すという行為をしたに過ぎません。つまり、暗黙のうちに意識しつつ（ほとんど無意識と言ってもいいですが）ボタンに手を伸ばしそれを押しただけです。研究室を出てトイレに向かって歩く場面では、この「意識」はもっと暗黙かつ漠然としたものだったようを感じられます。確かに私は「ボタンを押す」という行為をしたし「トイレに向かって歩く」という行為をしたのですが、その行為をするということをはっきり明示的に意識していたわけではありません。「暗黙の気づき」がともなっていたという程度にとど

ります。

このような、経験にともなう「暗黙の気づき」を指して、現象学（E・フッサーに始まる現代哲学の一部門）では「前反省的（pre-reflective）」という形容詞を用います²⁾。もっと明示的な意識とともに経験をはっきりと振り返る作用を「反省」と呼ぶとすると、そうした明示的な意識がはたらき始める以前の段階で暗黙のうちに生じている意識作用があるため、これを区別して「前反省的」と形容するのです。

ここで注目して欲しいのは、前反省的な気づきという暗黙の意識作用にも、それに付随してすでに「自己」が生じていることです。ボタンを押してトイレの水を流す、という行為をどれほど漫然と遂行しているとしても、それが「私の行為である」ということに私は前反省的に気づいています。ボタンを押す行為は、けっして私以外の他人がしたことではありません。あるいは、まったく意識がないままに夢遊病のような状態したことでもありません。それは「私の経験」として起こったことです。

私たちの日常生活で生じる経験の多くは、ここに記述したように、単に前反省的な気づきとともに生じており、明示的な意識（=反省）をともなっていることのほうが少ないよう思います。ただし、だからといって自己が存在しないわけではなく、何らかの経験が生じている時、経験する主体はそれが「私の経験」であることに漠然とではあれ気づいています。当たり前すぎて的確な言葉にするのがかえって難しいのですが、あらゆる経験にともなう「私の」という感じこそ、もっとも始原的な意味で「自己」と呼びうるもので、現象学者のD・ザハヴィがこの点を的確に要約しています。

経験とは別の何かとして、あるいは経験の上にある何かとして、自己を考える必要はない。また、自己と経験の関係を、所有という外的関係として考える必要もない。この、前反省的な私のものという感じ（sense of mineness）に、ミニマルな、あるいは核心的な自己の感覚を認めることもできるのである。³⁾

経験それ自体のうちに「私の」という感じがすでに織り込まれているのですから、「経験とは別の何か」として、あるいは「経験の上にある何か」として自己を構想する必要はありません。ある経験が「私のもの」として与えられているその感じ（sense of mineness）の中にこそ、核となる「私」がす

に組み込まれているからです。なお、哲学的にはこのような感覚に宿る自己もすでに派生的であるとの指摘もあって、自己の起源をより深い層に求める議論もあるのですが、話が煩雑になるのでここでは立ち入らないことにします⁴⁾。

いずれにしても、ひとが何かを経験している時、その経験は反省以前の気づきを必ずともなっています。そして、その気づきが「この経験は私の経験である」という感じとともに自己を構成しているのです。自分であるという「感じ」という点では、「自己」という言葉よりも「自己感 (sense of self)」のほうがしっくりくるかもしれません。

■ミニマル・セルフとは何か

経験に付随する前反省的な自己感は、もっとも単純かつ最小の自己という意味で「ミニマル・セルフ (minimal self)」と呼ばれています。哲学者のS・ギャラガーは、先に言及した論文の中で、ミニマル・セルフの構成要素を二つに区別しています。ひとつは、経験それ自体に織り込まれた「私の」という感じのことで（ザハヴィが言う sense of mineness）、彼はこれを「所有感 (sense of ownership)」と言い換えています。経験に備わる「私のもの」という性質、つまり所有性という観点に着目した概念です。

もうひとつは、行為にともなう「私が」という感じです。トイレのボタンを押して水を流す。私は、これが「私の経験」として起こっているだけではなく、「私が引き起こした行為」であることにも暗黙に気づいています。どれほどぼんやり行為しているとしても、私がこの自覚を失うことはありません。このように、「この行為を引き起こしているのは私である」という主体性の感覚のことを、ギャラガーは所有感とは区別して「主体感 (sense of agency)」と呼んでいます。自分が行為の主体として振る舞っているその感じのことを指す概念です。

所有感と主体感を区別すべき理由は、不随意に生じる反射や、他者によって引き起こされた受動的行為を念頭に置くとよくわかります。たとえば、歩行中に誰かにぶつかってよろめいたとしましょう。その時、「よろめく」という振る舞いについて、私は自分がこの振る舞いを引き起こしたとはけっして感じません。よろめく経験には主体感がともなわないのです。その一方で、「これは私の経験である」という感じはけっして消えることがありません。

うのは合理性があると思いますが、「身体所有感」を感覚モダリティに関連づけて、それだけで理解できたつもりになるのは感心しませんね。



「ナラティブ・セルフ」…これは、私が生きている世界だ

本田 そうですね…すべてわかりますとは正直言えませんが、このあたりはゆっくり自分で振り返りつつ、考えてみたい興味のあるお話をしました。ありがとうございます。…で、次に「ミニマル・セルフ」から「ナラティブ・セルフ」へと展開していく流れについて話を移していきたいと思います。「ミニマル・セルフ」について言えば、リハビリテーションに関わっている人間であれば、このあたりは生理学的な仕組みであるコンパレータ・モデル、比較学習モデルを使って理解しようとするのだと思います。つまり意図から始まり、行為結果を照合する過程の中で、空間性の不一致とか時間性の不一致を検出して、これを調整していく仕組みとしてという意味ですが。で、たとえば左片麻痺で半側空間無視も呈していて身体失認がある患者さんを担当した時のことを見出しているのですが、この方は「この手はお母さんの手だ。自分の手ではない」と言い切ったのです。最初は僕も安直にといいますか、運動の意図と結果の不一致でそういうのだろうぐらいに考え、左上肢の運動麻痺に対するアプローチをしていたんです。その後若干麻痺していた左上肢の動きがよくなってきたので、「お母さんの手」と言い切ったその手も自分の手に戻るんじゃないかと甘い期待をもつたりもしました。ですが、結果はだめでした。即時的には自分の手に戻るような感じがあるのですが、次の日には元に戻っていると。で、いろいろとやりとりをしていくうちに、なぜそれが自分の手じゃなくて、お母さんの手なのか聞いていくうちに、本人は「この手が冷たいからわかる」と言うんです。じゃあ皮膚温が違うのかと思って触ってみると、僕にとっては一緒、左右差がなく、どちらも普通に温かいわけです。そうなるとこの手がもっている問題というのは、麻痺による随意性の障害や麻痺した手の血流などとは別の理由があるのではないかと、「その冷たい」という言葉を認知意味論的に考えることはでき

ないかと。たとえば、それはなんらかの理由によって、この手には自己らしさを生み出す何かが欠けたことによって親和性が失われたのではないかと。そう考えるに至ったのは、いくつかの本を調べている中で、ファインバーグという医師が書いた『自我が揺らぐとき』という本に出会ったからです。この本を読んだ時にヒントとなったものは、身体失認は「カプグラ妄想」の身体版ではないか、という着想です。それを手に応用することができるんじゃないかと思ったわけです。つまりこの患者さんは、物理的な手という対象の認識はできるのですが、そこに情動的な、といいますか、親しみのような情動的な繋がりが稀薄になり、親和性がなくなったということをその手は「冷たい」と表現しているのではないかと考えたのです。たとえば「あの人は冷たい人だ」と言う時の「冷たい」という言葉のもつ意味と同じではないかと。

田中 面白いですね、それは。自分の手のように見えるんだけど、自分の手に感じられるような親しみがないですね。

本田 はい。そうなんです。じゃあこれからどんなことがやれるのかと思いながら、その患者さんにいろいろと聞いていくうちに知ったことなんですが、その方にとっての生きがいが息子さんと同居していた時の、毎日包丁をもって食材を切って料理をしていた時のこと、そのために畑作りを一生懸命やっていた手だということを語り始めてから、治療を始めた当初は抽象的な印を3つほど目の前において、そこに手をもっていって、「今あなたの手はどこにありますか」というその空間的位置を聞く訓練をしていたのですが、そのエピソードを聞いた後に今度はその印を野菜の模型に替えて、今度は「あなたが今、手でとろうとしているお野菜はなんですか?」とか「今、手にとろうとしているお野菜で息子さんに何を作つてあげようと思っていますか?」あるいは「作つてきましたか?」というような質問に変えたところ、その直後から自分の手になったという経験をしました。

田中 それはすごい。

本田 ええ、それ以来、何ヶ月経っても、どこの場面でもそれはその人にとって自分の手になったんです。僕以外の人間が尋ねても私の手は私の手だと。

田中 素晴らしいですよ、それは。

本田 ありがとうございます。で、彼女にインタビューをしてみました。「どうして、あなたは昨日まで、この手はお母さんの手だと言っていたのに、なぜそれが自分の手だと思えるようになったんですか」って聞いたら「よく考えてみたら、ここが（と言って左肩を右手で握りながら）私のからだに通じたから。これは違うと思った」と語ってくれたのです。さらに「この手は温かいですか、冷たいですか？」と再度尋ねると、「温かいです」と答えたのです。訓練では肩の運動覚を介して自分の手がどこに向かっていくかということをやっていたし、ここで通じているというその言葉のように、訓練でも肩がポイントになると考えていたところまでは正しかったわけですが、でも結局は、こんなふうに変わったことには本人の情動的な記憶というものがこの肩と手とをうまくリンクさせたということだったと思うんです。それを「しっくりくる身体になった」という言葉と結びつけた時に、もう一度、さっきの「身体所有感」を知覚のモダリティにあまり過度に結びつけてはいけないだろうという先ほどのお話との兼ね合いについてお聞きしたいのです。この治療経験は情動的なものが「私」を生み出すのだということを示唆していると思いますが、それが、たとえばこの例のように肩の運動覚のような知覚のモダリティとどのように関わり合っているのかということなんです。つまり情動的な記憶と「身体所有感」とのつながりについてです。

田中 今のエピソードはとっても素晴らしいと思います。だから逆に、それに対して自分はどう返せるのかなと思いながら聞いていました。文字どおりに臨床例としてとると、所有感がどう回復したのかという事例だととれるわけですが、ちょっと角度を変えさせてもらって、身体図式にもう一度その左手が包含されたんだという捉え方をしてみてもいいかなと思ったんですね。なぜかと言いますと、さっき履歴の話が出てきましたけれども、その人が生きてきた履歴があって、その中で繰り返されてきた行為が習慣として身体図式の中に堆積されていて、そのように堆積されていた「私の身体」の中から左手だけが排除された格好になっていた、発症を機にうまく包含されなくなっていたのではないかと思うんです。で、その患者さんは治療によって何を取り戻し

たかというと、なじみの感情を取り戻す回路を見つけたということなんじゃないかと思うんですね。どういうことかと言うと、身体図式というものは環境の中で同じ行為を繰り返すことで形成されていくわけですが、それは、言葉を換えると「なじむ」ということなんですね。ある環境の中で、ある仕方、同じような仕方で行為を繰り返していくことで、「これが私の生きている世界である」「これが私の身体である」というなじみの感情を世界との対話の中でつくりあげていくということです。そうなると我々の身体は単に物理的なものでできているわけではなくて、まわりの環境の中で何をやってきたのかに応じて、つまり履歴に応じて、私と世界とのなじみの感情を記憶とともに引きずっと生きているわけですね。そうだとすると、本田さんの介入によって、患者さんは「私がなじんでいる世界」に接触している「私の身体」を取り戻すヒントを得たのだ、と考えてはどうかと思うのです。息子さんのために料理を作っていたという経験、その家庭の中に私がいて、息子さんがいて、息子さんのために自分が料理を作っているという、まさにその風景の中にもう一度、その人の身体が投錆されるきっかけを得たのではないかでしょうか。もう一度その身体をもってその世界に入っていくというか、なつかしい感情とともに、感情と記憶と、親しみを覚えている世界の感じというものがいっぺんに蘇ってくるような感じがあって、それが身体図式をもう一度、左腕を含む形で取り戻させるプロセスになっていたということではないでしょうか。まあ、生理学的に言うと「情動」という単純な一語になってしまいますが、「生きられた身体」からみると「私がなじんだ世界」というものを身体が取り戻した」と、そういう事例になっているんだろうと思います。で、私の世界を取り戻すきっかけになっていたのが料理を作っている左手であり、料理を作っている時に目の前に見えていた野菜であったと、そういうことではないかなと思います。私の理解がどこまで患者さんの経験に迫れているかわかりませんが、現象学的にはそのように理解できそうです。

- 本田 ああ、そんなふうにみることはなかったというか…所有感がもつ「堆積」が繋がっている話なんですねえ…
- 田中 同じことを角度を変えて時間軸からみると「所有感」ということにな

るんでしょうね。情動に媒介されて視覚と運動感覚と固有感覚の多感覚統合が再び成立したので、所有感が戻ってきたということでしょうね。ですから、感覚モダリティに沿って神経生理学的に理解することもできるんだけれども、身体図式が表している「生きられた身体」という別の角度からも語れるということでしょう。「身体」とはもちろん生理学的であり解剖学的でもある構造をもったのですが、それを「生きる」という観点から捉えることもできる。「身体」とはけっしてどれか一つの意味しかもっていないものではないわけです。世界と対話する身体というものを先ほどのシェーマのように空間的に捉えることもできるでしょう。そして、もっと言えば、僕らが生きてきた履歴が身体の中に堆積されているということは、それがナラティブのほうにつながる回路をもっているということでもあるんだと思います。つまり身体とナラティブとは切ってもきれない関係をおそらくもっているということです。…それにしても、今の事例は相當に深く議論できるような大事なものをいっぱい含んでいると思います。単に身体所有感を取り戻した事例としてのみ語るにはもったいないというか、もっと重大な論点がそこにあるような気がしていて、まだ自分でもそれをうまく語りきれていないという感触があります。…そのように「私の身体」が言っています（笑）

本田（笑） そうなんですか。重大な論点の可能性が…それを聞くと僕自身もまた考えてみたくなりました。…これまでのお話で「ミニマル・セルフ」についてかなり話してきましたが、僕たちの身体に堆積する僕たち一人一人の生きてきた履歴、それも僕たち一人一人がそれぞれのありようで関わってきたその環境をも含んだものとして捉えると、そこには「ナラティブ・セルフ」につながっていく「回路」が見えてくるということが言えると思います。それが大事な意味をもつのがまさにリハビリテーションの臨床で、そこでは患者さん一人一人の履歴のみならず、それに関わるセラピストの履歴との対話がとても大事な役割をもつということも自ずと考えさせられます。そこで今度は田中さんには身体性と言語との関わりについてお聞きしたいと思うのです。

田中 はい。